

第1回国際研究皮膚科学会 開催結果報告

1 開催概要

- (1) 会 議 名 : (和文) 第1回国際研究皮膚科学会
(英文) International Societies for Investigative Dermatology 2023
(略称: ISID 2023)
- (2) 報 告 者 : 第1回国際研究皮膚科学会 会頭 梶島 健治
- (3) 主 催 : 国際研究皮膚科学会、一般社団法人 日本研究皮膚科学会、日本学術会議
- (4) 開 催 期 間 : 令和5年5月10日(水)～13日(土)
- (5) 開 催 場 所 : 京王プラザホテル東京・新宿NSビル(東京都新宿区)
- (6) 参 加 状 況 : 50ヵ国・地域 2,594人(国外1,802人、国内792人)

2 会議結果概要

- (1) 会議の背景(歴史)、日本開催の経緯:

国際研究皮膚科学会(International Societies for Investigative Dermatology: ISID)は、世界における皮膚科学の研究を専門とする組織を国際的に統合化することを目的に2013年に設立された。前身として、米国研究皮膚科学会(SID)、日本研究皮膚科学会(JSID)の合同学会が1985年に米国ワシントンDCにて開催され、その後International Investigative Dermatology(IID)へと発展した。近年は、1998年にCologne(ドイツ)、2003年にマイアミ(米国)、2008年に京都、2013年にエジンバラ(英国)、2018年にオーランド(米国)にて5年に一度開催され、皮膚科学の発展に多大なる貢献を果たしてきた。

従来、アジアからは日本研究皮膚科学会(JSID)のみが加盟して発展してきたIIDであった。しかし今回は、韓国研究皮膚科学会(KSID)、台湾研究皮膚科学会(TSID)、オーストラリア研究皮膚科学会(ASDR)、シンガポール研究皮膚科学会(SRSS)などのアジア・オセアニア地区の研究皮膚科学会をはじめとして世界中の同種の学会が加盟できることにより、ISIDとして真の国際学会へと新たな一歩を踏み出した。

今回のISID2023はISIDの設立後初めての学術大会であり、2015年5月9日の米国研究皮膚科学会(ニューオーリンズ)においてアジアで開催されることが決定した後、同年9月12日に欧州研究皮膚科学会(オランダ・ロッテルダム)において公募が開始された。書面審査に残ったJSID(日本研究皮膚科学会)とKSID(韓国研究皮膚科学会)の両学会により、2017年9月29日に欧州研究皮膚科学会(オーストリア ザルツブルク Salzburg Congress Center)にて、プレゼンテーションがなされた。2017年12月16日にISID理事による投票が行われ、日本での開催に至った。

- (2) 会議開催の意義・成果:

皮膚は人体で最大の臓器であり、外界と生体が触れ合う場所として、恒常性や生体防御に中心的な役割を持ち、そのバイオロジーの解明は皮膚のみならず医学全般に対して普遍的な意義を有する。皮膚科学は、皮膚を基礎および臨床医学的な観点から研究する学問であるが、その中でも研究皮膚科学は、より広く基礎的な生物学としての皮膚科学を研究す

るものである。その目的は臨床的応用性を踏まえた最新科学としての皮膚に関する研究を追求することであり、医学・生物学全体からも大きな注目を集める領域で、2021年ノーベル医学生理学賞も皮膚の感覚センサーの研究であった。

今回の会議では、分子生物学、発生・再生医療、免疫・アレルギー学、生化学、人工知能などの分野横断的見地からの成果が皮膚を舞台として報告され、その成果は疾病の克服等の臨床医学にも貢献し、国民の福祉の向上につながるものと期待される。

(3) 当会議における主な議題（テーマ）：

メインテーマ：「皮膚を場とした生体システムを包括的に理解すること」

主要題目：適応免疫と自己免疫、発がんとかん遺伝学、皮膚における細胞間相互作用、表皮の構造とバリア機能、遺伝病、遺伝子調節、遺伝子治療、自然免疫、微生物学、微生物叢、疫学研究、臨床研究、薬理学と医薬品開発、光生物学、色素沈着と黒色腫、皮膚、付属肢、および幹細胞生物学、皮膚の色、組織の再生と創傷治癒、臨床応用研究

(3) 当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割：

皮膚研究に関する国際会議として歴代で一番多い登録演題数（1,806 題）及び参加者数（2,594 名）を記録した。特筆すべきは、その内訳が計 50 か国にまで及んだことで、第一回の真の国際会議として相応しい結果となった。学術的、文化的に活発な交流が深められたことはもちろん、この大きな成功を世界が目当たりにしたことで、当分野における日本のプレゼンスが確立された。

(4) 次回会議への動き：

今回のレベルの高いプログラムを通じて再実感された「奇跡の皮膚研究」のすばらしさを新しい世代に受け継いでいくために、いかに若者にとって魅力的な学会で居続けるかを課題に据えている。次回は5年後にヨーロッパ地域で開催される予定である。その後も5年に一度ずつ、北・南アメリカ大陸地区、アジア・オセアニア地区、ヨーロッパ・アフリカ地区と3つの地区をローテーションしながら開催される。

(5) 当会議開催中の模様：

5月10日の朝から受付を開始し、ISID2023の開会に先立って7本のサテライトシンポジウムと、Future Leaders Symposium、Leo Foundation Awardsの表彰式が開催された。15:10からの開会式では和太鼓の演奏が開会を告げ、各地域からRising Star演題が発表された。スポンサードセッションの後Welcome Receptionが開催され、1,300名ほどが集まった。

5月11日はスポンサードモーニングセッションから始まり、Plenary Sessionや講演が開催された。中でも京都大学・iPS研究所山中伸弥教授の基調講演では多くの観客を集めた。昼のランチョンスポンサードシンポジウム後は6分野のコンカレントシンポジウムが開催され、夜はスポンサードセッションとポスターセッションの後、Social Gatheringが開催された。

5月12日は各Societyの総会から始まり、Plenary Sessionや基調講演、ランチョンスポンサードセッションと6分野のコンカレントシンポジウム、ポスターセッションが開催された。夜は各Societyから会の準備に特に貢献した人が招待されたPresidential Dinnerと若手の交流イベントが並行して開催され大いに盛り上がった。

最終日5月13日はスポンサードモーニングセッション、Plenary Session、基調講演、ランチョンを含むスポンサードセッション、6分野のコンカレントシンポジウムの後、16時に閉会式を行った。午後のセッションに並行して、市民公開講座と高校生対象セミナーも開催された。閉会式の後、Asia Oceania Symposiumと3本のサテライトシンポジウム

が行われ、夜にはアジア・オセアニア地域の交流促進イベントが開催された。翌日以降もサテライトシンポジウムが各地で開催された。

(6) その他特筆すべき事項：

前身の学会があったとはいえ、本会議の開催が第一回大会であったことから、各地域がどう連携して準備を進めていくか、プログラムの構成をどうすべきかなど、ISIDの枠組みを作り上げていくことに頭を悩ませたが、今後の礎を築くことができたと考える。

また、コロナウイルス感染症の影響下でどのように会を開催すべきか、先行きが見えない中で準備を進めることは非常に困難であった。常に複数のプランを持ちながら、決断のタイミングを見極め、通常の倍の労力が掛かったと感じる。結果的に、会期直前に5類感染症に移行し、国内外から多くの参加者が来場できたことは幸運な奇跡の一つであった。

3 市民公開講座結果概要

1) 市民公開講座

- (1) 開催日時：令和5年5月13日（土）14:00～15:00
- (2) 開催場所：京王プラザホテル東京42階「高尾」及びライブ配信
- (3) 主なテーマ、サブテーマ：「教えて一なるほど！アトピー性皮膚炎」
- (4) 参加者数、参加者の構成：現地参加19名 web参加89名 計108名
- (5) 開催の意義：

市民の関心が高いアトピー性皮膚炎につき、わかりやすく、かつ多面的な方向から解説することで、少しでも不安を解消する。

- (7) 社会に対する還元効果とその成果：

コロナウイルス感染症の状況も踏まえて、現地開催に加えwebでのライブ配信も行ったことで、居住地に縛られず多くの方に参加いただくことができた。翌年以降、同じような講座の開催を希望する声もあった。

2) 高校生対象セミナー

- (1) 開催日時：令和5年5月13日（土）14:00～15:30
- (2) 開催場所：京王プラザホテル東京4階「花A・B」及びライブ配信
- (3) 主なテーマ、サブテーマ：「未来の科学者育成セミナー」
特別講演「皮膚と微生物の共存と攻防」（英語講演）、五十嵐美樹氏によるサイエンスショー
- (4) 参加者数、参加者の構成：現地参加20名 web参加38名 計58名
- (5) 開催の意義：皮膚の健康において果たす役割を解説し生命科学の魅力を伝える
- (6) 社会に対する還元効果とその成果：

科学分野に興味のある高校生に皮膚免疫や化学実験の面白さが伝わった。また、質疑も活発に行われ、海外で働くことや研究者になるという事に関して理解が深まったようであった。

4 日本学術会議との共同主催の意義・成果

日本学術会議との共同主催が認められたことや、開会式において日本学術会議副会長および岸田文雄内閣総理大臣よりメッセージを賜ったことは、ISID2023が国にサポートされていること、つまりは日本における研究皮膚科学の注目度の高さを国内外関係者に強く印象付けるものであり、当分野の日本のプレゼンス向上に繋がったと考える。

また、会場費等の援助を受けられたことは、運営費を節約し、その分充実した内容を参加者に提供するための大きな支えになった。さらに、市民公開講座を開催し、広く市民へ成果を還元できたことも、共同主催の賜物と考える。

